共栄学園短期大学研究紀要　第2号　1986

マリノフスキー：『日記』と彼をめぐる女性達

Malinowski : An Essay Review of His Field Diaries and the Influence of Women on His Life

谷　口　佳　子*
Yoshiko　Taniguchi

I　序：マリノフスキーのパラドックス

今日、多少なりとも人類学に関心を有する者ならば、マリノフスキーの名を一度は耳にしたことがあるであろう。Bronislaw Kasper Malinowski（1884－1942）は、1920年代から40年代にかけて、英国を中心に華々しく活躍したポーランド生まれの人類学者である。また、実証的・科学的な実地研究調査に基づく現代人類学の創始者としても、ラドクリフ・ブラウン（Alfred Reginald Radcliffe-Brown、1881－1955）と並び称せられる、著名で偉大な存在である。

だがその名声や偉大さにもかかわらず、マリノフスキーに対する評価は両義的性格を帯びており、時代により、個人により、あるいは同一個人による評価でさえも、肯定、否定の両面を併せ持つというように、非常に曖昧で不安定なものとなっている。実際に、マリノフスキーほど、長期にわたり多くの人類学者を魅了し続け、その人格と業績の両面にわたって、さまざまな論争の種を提供し続けてきた人物も稀であろう。

この点に関し、マリノフスキーの生前の信頼を一身に受け、彼の死の直前まで親密な交際を維持した高弟の1人[1]であるレイモンド・ファース（Raymond Firth）は次の様に述べている。

> 「マリノフスキーの公的イメージには未だに一種のパラドックスが存在する――即ち、彼に付された非常にパーソナルな批判的評価と、彼が後世の人類学者に与えた広範な学問的影響との間には、ある種の断絶が見られる」[2]

* 秘書専攻

確かにマリノフスキーについては従来より、頑固一徹なパーソナリティや、完膚なきまでに論敵を攻撃してやまぬ性癖など、その人柄に対する批判的な見解が存在する一方、他方では、野外調査法の確立を中心とする、人類学の発展に対する多大な寄与への惜しみない讃辞が捧げられてきた。しかしながらその両者が織りなすパラドックスのみならず、マリノフスキーの身辺には、常に、領域やレベルを異にするさまざまなパラドックスがつきまとう。彼の人生と業績に関するイメージは、まさにパラドックスそのものと言っても過言ではない。

そこでこの小論では、彼の人生と業績を彩るさまざまなパラドックスのうち、まずマリノフスキーの学問的業績を評価する際の通説となっている、①調査者および理論家としての評価の内に見出されるパラドックスの内容を概観する。続いて『日記』の公刊を契機として明らかにされた、②フィールドにおける調査者としての彼の態度や価値観に関するパラドックスについて述べる。さらに①および②の問題との関連において、③身近な人々の回想や『日記』に登場する女性達をめぐるパラドックスの様態を分析する。これら一連の過程を通して、この偉大な人類学者の多様な全体像に少しでも新しい光をあてることができれば、望外の幸いである。

Ⅱ　「フィールドに強く、理論に弱い」[3]マリノフスキー

従来のマリノフスキー論は、殆んどの場合、彼の調査者としての功績を讃え、調査方法とその成果を高く評価する一方で、他方では一般社会理論の欠落や不備を指摘するものが多かった。具体的には、ラドクリフ・ブラウンの業績と比較・対照される形で論じられることが多く、ラドクリフ・ブラウンの厳密な構造機能論的アプローチや対象領域の限定への積極的評価に対して、マリノフスキー理論の包括性・曖昧性を批判する形で、議論が展開されてきた[4]。例えば、下記に引用するリーチ（Edmund Leach）の厳しい断定に対して、真向から異を唱える人類学者は、むしろ少ないであろう。

> 「私にとって、トロブリアンド（＝マリノフスキーの調査地）島人について語るマリノフスキーは、刺激的な天才であるにもかかわらず、文化一般を論ずるマリノフスキーは、往々にして平板陳腐な凡人にすぎない。」[5]（傍点筆者、以下同様）

Ⅱ－1　民族誌の記述と参与観察

確かに、トロブリアンドの文化を生き生きと写し出すマリノフスキーの筆力には、「想像力に富んだ天才」[6]の趣きを感じさせるものがある。従来の民族誌（＝諸民族の文化についての具体的記述）が、インフォーマントからの伝聞をたよりに再構成された、系図、民話、規範等の羅列であったのに対し、マリノフスキーは、彼のモノグラフ（＝特定文化の具体的記述）の中に、生き生きとした現実の人間関係や具体的内容を豊富にもり込んだ。その結果、彼が一般化を行う時には、その基盤となっている状況のコンテキストや、「さまざまな相互関係の織りなす微妙なあや（intricasies of multiple interrelationship）」[7]に至るまで、読者は既に熟知していることになる。

だがこのような生き生きとした描写を可能にしたのは、単に、彼の豊かな想像力や文体に対する芸術的センスである、とばかりは言い切れない。その背後には、現地調査の目標に対する明確な自覚と、綿密な現地調査（intensive fieldwork）のための実際的戦術や情報収集技術が存在した。

マリノフスキーによれば、現地調査の目的は、原住民の考え方、生活への関わり合い、彼らをとりまく世界の捉え方などを、彼ら自身の眼で見ることができるように自分を訓練することによって、自分自身のより深い認識に達することであった[8]。そのために彼は、長期にわたり、現地の社会の一員として原住民と生活をともにし、彼らの日常生活の観察を通じて資料を得るという、いわゆる参与観察（participant observation）を、自らに課した。とりわけ、通訳を排し、調査者自らが原地語を介して原住民とじかに語り合うことの重要性を強調した[9]。

また実際の資料収集にあたっては、①行動規範や定式化された行動の型、②実際の行動の様態、③行動についての典型的解釈、の3段階に分けて、もれなく広汎に資料を集めなければならない[10]、と考えていた。

Ⅱ－2　第一級の臨床理論

前述の3段階区分に明らかなように、マリノフスキーは、社会的現実の多様性と重層性を十全に認識しており、人々の言及と実際の行為との間に見られる乖離や、社会秩序を維持するための規範と個人の利害追究の動きとの間の緊張関係に注目しながら、トロブリアンド島民の現実の行動を克明に記述していく。それと同時に、彼らが生きている社会的・文化的コンテキストを構成するさまざまな文化要素相互間の機能的連関や、諸制度間の相互依存のあり方を分析することによって、個人の行動の隠された動機や、各文化要素の意味を把握しようと努める。

このような現実理解のプロセスと、その成果であるモノグラの描写に対して、タルコット・パーソンズ（Talcott Parsons）は「第一級の臨床理論」[11]の顕れである、と賞讃を惜しまない。また前述のリーチでさえも、「従来の民族誌の無味乾燥な記録と、マリノフスキーの民族誌がもたらす生き生きとした人間の息吹きとの相違は、単に芸術的工夫の差異に由来するのではなく、むしろ両者の理論的洞察の有無にかかわるものである。」[12]と述べている。この点もまた多くの研究者が認めるところである[13]。「理論に弱い」マリノフスキーが、現実に密着した社会分析においては、実は第一級の理論家であった、というパラドックスをここに見出すことができる。

では何故、一般的・抽象的理論のレベルでは、「ナイーブ」で「お粗末な功利主義者」であり、「社会システムの概念に盲目」[14]であった、と酷評されるマリノフスキーが、「第一級の臨床理論」を創造しえたのであろうか。この問題を論じたのが、前出のリーチの論文「マリノフスキーの経験主義の認識論的背景」である。彼はマリノフスキーを「熱狂的かつ理論的な経験主義者（a fanatical theoretical empiricist）」[15]であるととらえ、その理論的背景をウィリアム・ジェイムス（William James）のプラグマティズムに求める。リーチの論文は多くの貴重な示唆に富むが、ここではこれ以上立ち入らず、次の語を引用するに留める。

> 「……マリノフスキーの抽象的・理論的著作は、単に時代遅れ（dated）と言うばかりではなく、全く役に立たない（dead）代物である。

だが逆説的に言えば、マリノフスキーの人類学上の偉大さは、まさにこの状況のなかに見出しうる、と私は考える。マリノフスキーが想像力に富んだ天才であることは疑いようのない事実である。だが抽象的理論に対する彼の偏見のために、その想像力が常に地を這わざるをえないのである。その結果、ユニークな逆説的現象――熱狂的・理論的経験主義者――が誕生することになる。」[15]

Ⅲ　フィールドにおけるマリノフスキー

Ⅲ－1　『日記』の出版とそれをめぐる論争

前節で取り上げた問題は、マリノフスキーの学問的業績を評価する際に散見されるパラドックスの内容と、その由来に関するものであった。これに対し、彼の人格に関するパラドックスは、主としてフィールドにおけるマリノフスキーの態度と価値観を俎上に載せ、その矛盾を明らかにするものである。その背後には次のような経緯が存在する。

従来、彼の民族誌の成果は、何よりもまずトロブリアンド島民とのラポール（密接な関係）によってもたらされた、と信じられてきた。だが実際は、原住民に対する彼の態度がしばしば嫌悪や敵対感に満ちており、時には彼らを人非人として扱っている事実が『日記――ことばの厳密な意味において』（A Diary in the Strict Sense of the Term. 以下『日記』と記す。）の出版を契機に、白日の下にさらされることになる。まさにクリフォード・ギアーツ（Cliford Geertz）の言うように、現代人類学の創始者であり偉大な調査者＝マリノフスキーという「偶像は、粘土の足を有した」[16]のである。

『日記』はマリノフスキーの前後3回にわたるニューギニア調査の間に、ポーランド語で書かれたものを英語に翻訳し、彼の死後25年を経た1967年に、彼自身の意思とは関わりなく（マリノフスキー自身は生前、その出版を意図していなかった）公刊されたものである。『日記』は出版と同時に人類学者の間に「ちょっとしたスキャンダル（a minor scandal）」[17]をまき起こし、以後今日に至るまで、『日記』の解釈をめぐって激しい論争が展開されている。『日記』の記述に、彼の人格の反倫理性や調査の限界を指摘する人々[18]が存在する一方で、他方では、『日記』の一部のみを採り上げ、他の著作中に展開される彼の論点や主張を無視したまま、その人格や調査全体を否定してしまうことへの批判[19]も聞かれる。

これらの論文のうちで、『日記』の出版直後に書かれた書評やそれに対する反論の基底には、“偉大な調査者マリノフスキー”という神話的人格の正体暴露に対するショックが横たわっている。彼の『日記』には、調査地において体験された性的妄想や健康への危惧、原住民や白人居留者への不満、仕事に対する野心と不安、後にしてきた文明への憧景や過去の追憶、熱帯の自然美への賞讃と小説への耽溺といった事柄が、「一切の虚偽の幻想を排して」[20]赤裸々に物語られる。そのあまりの赤裸々さや感情の起伏の激しさを目のあたりにして、多くの人類学者は狼狽を禁じえなかった。さらに上述のショックに加えて、刊行後十数年を経た1979年に発表されたシュー（F.L.K. Hsu）の論文をきっかけに展開された、「人種差別主義者」[21]云々の一連のやりとりは、改めて『日

記』の編集および翻訳の妥当性や、刊行それ自体の是非を問いかけるものであった[22]。

だがいずれにせよ、『日記』をめぐる論評は、必然的に、人類学的認識や現地調査に内包される本質的問題への考察を含まざるをえない。即ち、『日記』の出現によって、マリノフスキーのような偉大な調査者でさえ、調査対象である人々や文化への無条件の一体化を成しえぬことが明らかになった以上、いかにして「彼ら自身の生きている世界に対する彼ら自身のヴィジョン」を認識し、ひいては「自己の再認識」に到達すべきであるのか、という問題である。さらにまた、植民地支配下の場合のように、調査者と被調査者との間に越え難い社会的地位や力の差異が存在する場合に、上述のような人類学的認識が果たして可能であるのか、という問題でもある。筆者にはこの小論でこれらの問に答える用意はない。その前にまず『日記』の記述を通して、マリノフスキーの調査の概要を把握し、原住民との関係を検討するのが先決であると考える。

Ⅲ－2　調査の概要と原住民との関係

1914年にオーストラリアにわたったマリノフスキーは、折からの第一次大戦の勃発という事情もあいまって、以後6年間、オーストラリア周辺に滞在することになる。この間前後3回にわたり、東ニューギニアの島嶼民社会の現地調査を実施した。第一回の調査は1914年9月から翌年3月にかけて、トゥーロン島のマイルー族社会を中心に行われた。マリノフスキー30才の時である。それに対し、1915年6月から1916年5月にかけての第二回の調査と、さらに1917年10月から翌年10月までの第三回の調査は、ともにトロブリアンド諸島を足場に実施された。『日記』はこのうち、初回の調査と、三回目の調査時に記された、マリノフスキーの心の軌跡を示す内心の告白の書である。第二回の調査に関しては、1915年8月1日の短い記載があるのみで、他に詳細な記録は残されていない。

カバリー（Phillis Kabbery）[23]、ストッキング（George Stocking）[24]、ヤング（Michael Young）[25]等の指摘を待つまでもなく、初回のマイルー調査と第二回、第三回のトロブリアンド調査との間には、顕著な質的相違が見られる。このことは『日記』の記述によっても明白に裏付けられる。マイルー調査の最も初期の段階ですでに、通訳を介しての情報収集や、村の外からの通いの調査の持つ限界性に気付きながらも、マリノフスキーは依然として白人牧師の家に住み続け、現地の白人達との交際に多くの時間を費している[26]。マイルー滞在の最後の数週間を除いて、原住民社会の真只中に入り込み、精力的に情報収集をはかる調査者の姿は、そこには見られない。だが二回目の調査の際には、トロブリアンドの中心地であるオマラカナの原住民村落内に居を定め、通訳を介さずに現地語で調査を始めるなどの改善が試みられた。引続き第三回の調査では、繰し返り起る病気や肉欲の嵐に悩まされ、原住民および白人との人間関係に疲れ果てながらも、自ら始めた仕事を最後までやり通そうとする、かつてない堅固な意志を持ち続けようとする一人の調査者の姿が浮かび上がる。原住民の村落内にテントを張り、一日の大半を原住民文化の観察と聴取にあてる彼の姿からは、彼と現地の人々との接近のプロセスを看取することができる。この状態に関して、彼自身は『西太平洋の遠洋航海者』の中で次のように述べている。

「実際、原住民たちは、私がなんでも、行儀のよい原住民ならそんなことをしようとは

夢にも思わないことにまで、鼻をつっこむことを知るにつれて、しまいには私を彼らの生活の一部であり、たばこをくれるのでなんとかがまんのできる一つの必要悪、いいかえれば、一人のうるさいやつとみなすようになった」[27]

だがこのことは必ずしも原住民とのラポールの確立を意味するものではない。原住民から、「たばこをくれるのでなんとかがまんのできる一つの必要悪」とみなされたマリノフスキー自身は、いったい、彼らに対していかなる感情を抱いていたのであろうか。下記の『日記』一節は、煙草を介さざるをえなかった彼の調査の限界と、原住民蔑視を表す典型的記述として、しばしば引用される箇所である。

「何度か彼らに腹を立てた。ことに煙草を配るだけ配ってしまうと、どこかへ行ってしまったのには腹が立った。原住民に対して感じたままを一言で表せば、『くたばれ、野蛮人』（"Exterminate the brutes"）[28]がぴったりである。」（p. 69、以下『日記』からの引用は、本文中（　　）内にページ数を示す）

上述のような原住民に対する嫌悪感は、調査が終盤に近づく頃になっても一向に緩和されず、彼にとって、原住民はあくまでも他者でしかありえない。例えば下記の記述の中に、マリノフスキーの深い疎外感、現地での他者性の認識を見出すことができる。

「民族学に関して言えば、私は原住民の生活に対してまるで興味が湧かないし、その意義を認めているわけでもない。その疎遠なことと言ったら、犬の生活も同然だ。」（p. 167）

「民族誌上の諸問題は私の心を奪いはしない。私は原住民に対してひどい嫌悪感を抱きつつ、心の奥底ではキリウィナの外で暮らしていたようなものだ。」（p. 264）

だがその激しい嫌悪感や疎外感にもかかわらず、彼は原住民文化の価値を全く認めないわけではない。むしろ理性のレベルでは、その素晴しさや、各文化要素相互間の絶妙なバランスや、原住民の思考の論理性を、その著作中で強調してやまない。ただ感情が認識についていかないのだ。この点に関し、彼は『日記』の中で次のように述べている。

「彼（原住民）からブワガウとタウクリポカポカ（いずれもトロブリアンドの呪術）に関する貴重な情報を得た。――同時に、彼の話に耳を傾けていられないほどの激しい嫌悪感。彼が私に聞かせてくれる素晴らしい話の全てが、心の内では、要するに受けつけられないのだ。民族誌の一番の難しさは、これを克服することだ。」（p. 166）

原住民の世界に深く入り込み、彼らの文化を「素晴らしい（marvellous）」と認識しながらも、最後まで原住民とその文化に対する生理的嫌悪感を捨てきれず、その矛盾を何とか克服しようと

努力するマリノフスキーの姿。——ここに、異文化の中で生活する者がしばしば体験する理性と感情の対立、そしてその克服をめざす自己との闘いの具体例を見出すことができる。

これはまた、フィールドにおける全ての人類学者が直面せねばならぬ基本的課題でもある。多くの人類学者が『日記』に深い共感と感銘をおぼえるのも、上述の不断の自己との闘いが、豊かな感受性とおそるべき内心の正直さを兼ね備えた一人の人間によって、徹底的かつ見事に、記録・分析されているからであろう。それ故彼の『日記』は、「自らのプシケの内的ダイナミズムを剝き出しにする試み」[29]であり、それにより、現地での自己の生活を組織だて、より深い自己認識に到達するための一手段であったとみなすことができよう。マリノフスキーが『日記』にこのような機能を付していたことは、下記の記述からも明らかである。

> 「生活という流れの中の、物事の尽きせぬ多様性を明瞭に表すことが、何と困難なことか。日記をつけるということを心理分析の問題として考えてみる。」(p. 247)

> 「日記の価値について考える（E.R.M.——マリノフスキーの恋人で将来の妻——と直接関連させて)。：単なるさざ波のあれこれではなく、より深い底流のありかを摑むこと。自己との対話を通して、生の内容を垣間見ること。」(p. 186)

Ⅳ　マリノフスキーをめぐる女性達

理性と感情の対立とその止揚を目指す営みは、前節で述べた調査者と被調査者の関係においてのみならず、彼の女性に対する関係の内にも、同様に見出せる。女性との関係においても、『日記』が告白と自己認識の手段として用いられているが、この場合にはより積極的な機能をも付されている。すなわち、『日記』は単なる自己認識の手段に留まらず、後述する如く、知と官能の矛盾を止揚するための手段として、さらに自己のパーソナリティの欠点を矯正するための手段、という性格を、色濃く帯びるようになる。そこで次にこの問題を取り上げ、性の側面における、マリノフスキーの「自己との対話」と闘いのプロセスを辿ってみたい。自分の理想とする「唯一の女性」に誠実たらんとして、誠実たりえず、自問自答を繰り返すマリノフスキー。真の人格的結合に至らぬ性を斥けながらも、人一倍強い性衝動に悩まされるマリノフスキー。——彼の女性との関係もまた、ある種のパラドックスを帯びている。

Ⅳ－1　母と妻の重要性

マリノフスキーは生涯二度結婚し、最初の結婚で三女をもうけた。その末娘で、現在ジャーナリストとして活躍するヘレナ・ウェイン（Helena Wayne）によれば、マリノフスキーは、その生涯において数々の女性達から非常に強い影響を受け、異常なまでに（to an unusal degree）女性に依存していた、と言う[30]。母、二人の妻、女性人類学者、友人、愛人、娘達など、マリノフスキーにさまざまな影響を与えた数多くの女性達のうちで、彼が最も深い愛情を抱いたのは、母

ジョゼファと、最初の妻エルシーであろう。

ことにエルシーの場合、『日記』に登場する幾多の女性のうちでも、彼女に対する言及は、その頻度や密度において他を圧倒し、断然、群を抜いている。それゆえ『日記』の後半は、まるでエルシーをヒロインとする一篇の恋愛小説の如き観をすら呈する。それに対し、母への言及は短く、ごく簡単な内容に終始するが、それにもかかわらず、彼女の重要性を無視することはできない。なぜならば、調査終了の直前に母の訃報に接したマリノフスキーの悲嘆・失望の有様（pp. 291－298）は、読者の心を動かさずにはおかぬほど強烈なものだからである。

興味深いことに、第三回の調査も終盤に近付いた頃の日記には、母とエルシーを同一化する記述が目立つ（pp. 241、245）。さらにヘレナの回想から浮かび上がる母の人格は、エルシーのそれと酷似している。両者の共通点を一言で表せば、“知性・感性の両面に優れ、母としてあるいは妻として、マリノフスキーに献身的に尽した、意志堅固な女性”ということになろう。“優れた知性ないし感性”、“献身”、“意志堅固”という美点は、彼と深い関係を結んだ女性達に、共通して見出される特徴でもある。そこで以下に、まずヘレナの回想をもとに彼女達の人物像を浮き彫りにし、その共通点を明らかにする。

Ⅳ－2　母

母 Josefa（Josephine）Łącka Malinowska は、ポーランドの裕福な教養ある家系の出身であり、その一族の中から、国会議員、政府高官、実業家など多数の有能な人材を輩出している。1883年に35才で Lucian Malinowski と結婚。翌年一人息子の Bronislaw Kasper が生まれる。父のルシアンは高名なスラブ語学者で、シレジア民族誌研究家でもあった。父の経歴は、マリノフスキーの同僚である人類学者の関心と敬意を集めるに充分であったと推測されるにもかかわらず、彼は生前、父について語ることがほとんどなかった。14才の時に父を失くした彼にとって、父は常に稀薄な存在であり、時には嫌悪の対象ですらある[30]。それに対し母は、その死後に至るまで確固たる実在感を持って、彼の娘達へと語り継がれた。ことに、生来病弱でしばしば失明の危機にさらされたマリノフスキーを励まし、自宅の暗い室内で眼帯をあてたままベットに横たわる彼に代って、母が中学校の全科目の教科書等を読み聞かせ、彼の学習を助けた逸話は、彼の娘達にとって一種の神話にさえなっていた。

ジョゼファは非常に知的な女性で、決断力に富み、自己に対する揺ぎない確信と強靱な意志に支えられた落着きを有した、と言う。この点を物語るエピソードが伝えられている。1910年から14年にかけて、マリノフスキーは人類学の研究のためロンドンに移り住む。息子をそのアパートに訪ねた母は、そこでしばしば、彼の友人である Isabel Fry（教育者）と、第1次大戦勃発前夜の当時のヨーロッパの政局について論じ合った。風雲急を告げる情勢に対する彼女の博識と透徹した洞察は、イザベルを驚嘆させずにおかなかった。そのうえ自信に満ちた態度で自説を主張する彼女に対して、イザベルは深い敬意の念を抱いたと言う。

Ⅳ－3　エルシー

一方、マリノフスキーの最初の妻である Elsie Rosaline Masson（『日記』では E.R.M.）の両親は、

双方とも代々学者の家系の出身であった。さらにスコットランド生まれの父自身も、マリノフスキーのニューギニア調査の当時には、メルボルン大学化学教授の職についていた。マッソン家には二人の娘がおり、ともに幅広い教養を身につけ、ピアノ・声楽などの素養があった。姉のマルニー（Marnie）は、後に、高名なオーストラリア史学者となる。

エルシーは1913年から14年にかけて、当時まだ未開拓の辺境であったオーストラリア北部に住み、この間、原住民の生活などについてのレポートを新聞に掲載し続けた。後にこれが一冊の本となって刊行される。マリノフスキーはその内容に深い感銘を受け、二回目の調査から帰った時に、自分の調査資料の整理を手伝ってくれるように、彼女に助力を請うた。これが二人の最初の出会いとなる。当時彼女は、第一次大戦に出征し、戦死した婚約者の死に触発されて、従軍看護婦となるべく、メルボルン病院で訓練を受けている最中であった。そのかたわら、看護婦の労働条件の改善や徴兵制度擁護のために、活発に活動を続ける社会運動家でもあった。彼女は病院勤務の合間を抜って、彼の仕事に協力するようになる。

そうこうするうちに二人の間に愛が芽生え、マリノフスキーは秘かに結婚を考えるようになる。だがエルシーの両親は二人の交際に猛反対だった。両親とも彼の知性には敬意を払っていたが、その性格が好きになれなかった。そのうえ、彼には当時すでに婚約者がいた。最初のマイルー調査の後、アデレードでモノグラフを執筆していた時に知り合い、婚約したNina Stirling（『日記』ではN.S.ないしはN.)である。ニナもエルシー同様、高名な学者の娘であり、1915年当時、マリノフスキーは彼女の父親の指導下で調査報告書の執筆にあたっていたのである。またメルボルンに来てからも、エルシー以外の女性数人と恋愛遊戯にふけるというように、マッソン夫妻にとって、彼は娘の将来の結婚相手として、とても容認できる人物とは思われなかった。当然のことながらマッソン夫妻に対する説得は難行し、マリノフスキーは彼女に求婚することもできぬまま、第三回の調査に赴かざるをえなかった。二人が実際に結婚したのは、マリノフスキーが調査を終えた後となる。

結婚後のエルシーは献身的な妻として家事・育児に専念し、マリノフスキーの高弟たちを暖かく自宅（ロンドンおよびアルプス山中の山の家）に迎え入れた。後年、難病におかされて歩行も困難となるが、発病後死に至るまでの十数年間、家庭の要たる自覚を捨てずに、戯曲や小説の執筆を続けながら、家事・育児の監督をし続けた。しばしばマリノフスキーの自宅を訪れ、エルシーに接することの多かったレイモンド・ファースは、彼女について次のように述べている。

> 「知性豊かで、教養にあふれ、独立心旺盛なオーストラリア女性。頭脳明晰でユーモアのセンスを有した。自分が結婚した相手が、どのような人物であるかを完全に理解しており、彼女は最初からそれを受け容れていた。」[12]

Ⅳ－4　理想の女性像

以上の如く、ヘレナ・ウェインやレイモンド・ファースの描く母と妻の人物像は、驚くほど相互に類似している。従って、二人の姿にマリノフスキーの理想の女性像を見出すことも、あながち的はずれではないだろう。彼にとって理想の女性とは、①たぐい稀な知性と快活な精神の持ち

主であり、単に頭が良いだけではなく、機知に富みユーモアのセンスを備えていなければならない。②独立心が強く、自分の事は自分で決断し、それを最後まで貫く強靱な意志の持ち主である。③感覚的にも優れ、音楽、美術等に造詣が深くなければならない。④彼を完全に理解し、献身的に尽す女性であり、時には無批判に彼を受け容れる包容力がなければならない。

母やエルシーは勿論のこと、彼が親しく交際した女性達は、それぞれの個性の相違にもかかわらず、例外なく上述の美点の大半を備えた人々であった。例えば、マリノフスキーの初期の高弟の一人として、親身になって彼の家族（病妻と幼な子三人）の面倒を見、彼の娘達から母の如く慕われたオードリー・リチャーズの場合はどうであろうか。彼女は高度の知性と洞察力を有する女性人類学者であるばかりでなく、「情が深く（compassionate)、感受性の鋭い（sensitive)」[33]人であったと言う。ユーモアのセンスに優れていたことは言うまでもない。

これに対し、エルシーの死後マリノフスキーと再婚するヴァレッタ（Valleta Swan Malinowska）は、さほど知的ではないが、衣装などに抜群の芸術的センスを発揮し、女性的な魅力にあふれていた。世界各地を一人で旅することを愛する、冒険好きで独立心旺盛な画家でもあった。

またライプツィヒ時代（1908年から10年にかけて、マリノフスキーはライプツィヒ大学で民族心理学と経済学を学んだ）に知り合ったアニー（Annie Brunton。日記の中では Anna Br. または A.M.B.。さらに T、T.S.、Toska などと記される女性と同一人物であると推測される。）は、その美しさと年上の女性特有の優しさで、彼を魅了した。彼女は人妻でありながら、ピアニストをめざして、単身、南アフリカからヨーロッパへ渡航する積極性の持ち主でもあった。マリノフスキーとともにヨーロッパ各地を旅行し、彼がロンドンへ移住する直接の契機となったのも彼女であった。即ち、ロンドンでさらにピアノの勉強を続けることになった彼女の後を追う形で、マリノフスキーはロンドン大学への留学を決意するのである[34]。『日記』にも明らかなように、彼女が南アフリカへ帰ってしまった後も、マリノフスキーは彼女への思いを断ち切れずに懊悩する。

上述のどの女性をとってみても、皆それぞれに、知的ないしは感覚的に優れた資質に恵まれ、当時の女性としては珍しく自主独立の精神にあふれていた。またそれぞれ独自の方法で、マリノフスキーへの献身を考えた人々でもあった。ただ、母やエルシーやオードリー・リチャーズの場合、その知性の高さが際立つのに対し、ヴァレッタやアニーは、どちらかと言うと感性に優れ、その官能的魅力が強く印象に残る、という点に両者の相違を見出すことができる。この相違の内に、マリノフスキーの人生における知と官能の矛盾・対立を感知することも可能であろう。両者の矛盾の止揚を通しての、知と官能の調和のとれた充足こそ、彼の人生にとって最も重要な課題であったことは、次節で述べる如く、『日記』の記述によって明白に裏付けられる。そこには知と官能の対立によって両端に引き裂かれながら、それを克服しようとして日々苦悩するマリノフスキーの姿が、ありありと浮かび上がる。

V　『日記』の女性像

前節では主としてヘレナ・ウェインの回想を中心にして、マリノフスキーをめぐる女性像を明

らかにしてきた。ではマリノフスキー自身は、これらの女性に対していかなる思いを抱いていたのであろうか。彼女達との交際に何を求めていたのであろうか。そこで次に、この問題を探る手がかりとして『日記』をとりあげ、エルシーやトスカに関する記述の一部を紹介しながら、彼女達に対する彼の想いの内容や、彼女達との関わり合いを通して、彼がどのように人生に対する思索を深めていったのかを検討してみたい。そこには前述の如く、「自己との対話」を繰り返し、「唯一の女性」に真に誠実たらんとする「自己との闘い」を通して、知と官能の矛盾・対立をのりこえようと努力するマリノフスキーの姿が浮かび上がる。

V－1　マイルー『日記』の女性達

マイルー調査の記録である『日記』の第一部では、多くの場合、ヨーロッパ文明への追憶と過去の回想の一コマとして、女性が登場する。そこでは、恋人、友人、母などに対するさまざまな想いが、ヨーロッパの文明を背景として、まとめて一度に語られることが多い（pp. 27、52等）。そしてその中心には常にトスカがいる。二人で旅したヨーロッパ各地の思い出（pp. 27、65）、ウィンザーやロンドンでともに過した日々のこと（pp. 21－22、27、65）、そして突然の別れ（pp. 21、42、68）。――マリノフスキーの筆を通して、トスカは『日記』の中に生き生きと再生され、息づいている。熱帯の小島にあってなお、その水々しさと存在感を失わない。

> 「11時に床に入ったが長いこと寝つけなかった。こういう時の常として、“女性”のこと、特にTのことを考えた。……セント・パンクラスに二人で着いた時のことが思い出される。その場所が気に入ったかどうか尋ねたところ、『いいえ。……汽車に乗り遅れないように急いでいる時に、ガーディナーの家を訪ねるなんて！』と、彼女の答えが返ってきた。それが最後だった。水曜日にも会えるものと思っていた。――だが、物理的な障害が生じた！……月曜日に彼女は毛皮の衿のついた紫色のドレス――前は白黒のチェック模様になっていた――を着てやって来た。私はピアノの前に腰かけ、『全ての高みを超えて』を歌った。母と三人で（en trois）喋った。夫の手伝いという彼女の仕事について、馬鹿げた意地の悪いあてこすりを言った。ドアの所まで彼女を送って行ったが、そこで互いにどなり合いになった。彼女にこの間の水曜日の約束を思い出させた。水曜の朝は大波のように愛が燃え上がっていたのに、と。……彼女の冷淡さを目のあたりにして、私の方もどうでもいい振りをして自分の殻に閉じ込もった。だがもしもあの頃、彼女を家に引っ張り込んで誘惑するか、宥めすかすか、懇願するかなりして、彼女を犯して（rape）しまっていたならば、何もかもうまく行っていただろう、という考えが、昨晩ふと私の頭をよぎった。だから四月一日は、苦い失望の日なのだ。」（p. 68）

だが彼女に対する熱情にもかかわらず、彼女は彼の理想とする「唯一の女性」たりえないことは、始めからわかっていた。彼女との関係には、マリノフスキーが求める、知と官能の調和のとれた充足をもたらす、全人格的な結びつきが欠けていたからである。

「まだTを愛しているので彼女が恋しい。彼女の肉体は、理想的に美しく神聖ですらある。だが、例えばZの場合のように、精神的に共有するものが何もないこともわかっている。」(p. 64)

「未だにTを想い、愛を感じる。だがこれは命がけの恋なんかじゃない。……創造的な価値、即ち、自分自身の拠り所を失ってしまったような感じがするからだ。未だに私を満たしているのは、彼女の肉体の魔力と詩的存在感なのだ。」(p. 27)

「エロティックな夢想。……だが一夫一婦制に対する私の本能的傾向は、いっそう強まっていると思われる。唯一の女性について考える。恋しいのはTだけだ——他の誰でもない。気持の上では彼女を忘れようと努めているのだが。——私が考える唯一の女性に比べたら、彼女は単にその一時的な代替物にすぎないのだから。」(傍点、原著者) (p. 65)

一夫一婦制を肯定する本能的傾向を自覚しながら、未だに「唯一の女性」を見出せぬまま、マリノフスキーはしばしばエロティックな夢想にふける。

「奇妙な夢だった。自分とうり二つの男との同性愛。不思議に自己性愛的 (autoerotic) な感覚。口づけするために自分と同じような唇が、自分と同じようにカーブしたうなじが、(横顔が) 自分のと同じような額が欲しい、という感じ。」(p. 12)

だが、この種のエロティックな夢想が、現実に彼の周囲に存在する、現地在住の白人女性や原住民女性に対する、淫らな欲望となって具体化されることは、マイルー調査の期間中においてはきわめて稀であった。また一見、一夫一婦制に反すると思える下記の夢想も、実は、知と官能の調和のとれた充足という、彼の最も深い願望の表明であるとみなすことも可能であろう。

「あけ方、自分の理想が実現される夢を見た。ツェニア、T., N. 達が一室にいながら、波型の鉄のカーテンで仕切られて、別々に寝ているのだ。どうもそれがザコパネ (ポーランド南部のタトラス山麓の登山の中継地) とニューギニアの間のどこかで起っているらしい。色褪せた幸福、失われた宝物」(p. 66)

ここに言う彼にとっての「自分の理想」とは何なのであろうか。具体的には複数の女性達の同居と専有を指していると思われる。だが、さまざまな特徴を有する女性達のうち、ツェニア (即ち前述のZ) を知の象徴、またT (即ちトスカ) を官能の象徴と解することにより、彼女達の同居は、彼にとって、知と官能の同時的充足を意味すると理解することも可能であろう。従って、彼の言う「自分の理想」とは、知と官能の調和のとれた充足という、彼の実生活において最も重要と見られる矛盾を解決することであった、と考えられる。

V－2　トロブリアンド『日記』の女性達

だが、マイルー調査から2～3年を経過した第三回のトロブリアンド調査（『日記』第二部）では、その様相が一変する。そこでは女性への思慕と文明への渇望が一体化される傾向がますます強まり、白人女性、ことにE.R.M.が文明の象徴と化している（pp. 190、240）。だが、『日記』第二部に登場する女性の多くは、第一部の女性とは異なり、決して「色褪せた」過去の「失われた宝物」などではない。フィールドのマリノフスキーが、当時および将来にわたっても、現実の世界で、友好な情緒的関係を保持したいと願う人々である[35]。

ことにエルシーの場合は、彼が長い間探し求めた末に、やっとめぐり逢うことのできた「唯一の女性」である。けして、他の女性とひとまとめにして語りうるような存在ではない。それ故、第二部の冒頭から最後に至るまで、エルシーこそ、彼にとっての「唯一の女性」であるとの自覚（p. 188など。下記参照）が、繰り返し、熱い思慕の念とともに語られる。彼女に対する彼の気持の動揺、渇望、内心の不実、懺悔などが、連日のように、風景や気候や体調、およびフィールドで読んだ小説の内容や、原住民や白人の言動と関連させて、克明に描かれる。

> 「彼女のことが再びたまらなく恋しい。私にとって彼女こそ唯一の女性であり、一人の女性が私に与え得るもの全てを具現している。」（p. 188）

だが、上述のような想いにもかかわらず、これまた第二部の冒頭から、再三再四、現地在住の白人女性に対する淫らな欲望が、E.R.M.への懺悔の気持を伴って、赤裸々に語られる（p. 109等。下記参照）。この種の女性に対する淫らな思いは、調査が進むにつれて、蚊帳の中での常軌を逸した性的妄想（p. 165等。下記参照）となって彼を悩ませ、調査の終盤の頃には、黒人女性に対して実際に「手を出す（paw）」（pp. 256、268、282）までになる。

> 「その辺に十時半頃まで坐っていて、……夫人に近づきになろうとした。彼女は全く無教養ではあるが、馬鹿ではない。頭の中で彼女を愛撫し裸にしてみて、ベッドに連れ込むまでどの位かかるか、計算までした。……つまりエルシーを心の中で裏切ったのだ。」（p. 109）

> 「夜中、淫らな妄想に捉われて目がさめた。よりにもよって（of all the people imaginable）、その相手が自分の家主の妻だとは！いい加減にしろ！自分の親友の妻まで誘惑しかねないという恐れ。E.R.M.への渇望がうねりとなって襲いかかってきた後では、それも全くあり得ないことではないのだ。ちょっとひどすぎる（C'est un pen trop!）。もうこれっきりにしなければ。」（p. 165）

このような性的逼塞状況に置かれながらも、マリノフスキーは、この間、少数の例外的場合（pp. 184、185、265）を除いて、エルシーを自己の性的欲望の対象とは考えていない（p. 204等。下記参照）。官能的魅力の不充分な彼女（p. 162。下記参照）に対して、不満を表明するよりも、

むしろ、知的側面に傾斜しつつもこの矛盾を克服して、エルシーとの間に知と官能の全人格的結びつきを確立することに、積極的な意義を見出している。エルシーこそ彼の（肉欲の？）「罪をあがない」、知的・官能的体験の全てを共有できる人生の伴侶にしたいと渇望しているからである。（p. 110等。下記参照）

「何度かE.R.M.のことを考えた。自然な感情のほとばしりと言うよりも、むしろ知的な思いだった。」（p. 204）

「時々、彼女の顔も思い出せなくなる。官能的側面では、彼女は私を征服できなかった。」（p. 162）

「彼女は人に与うべき宝や、罪をあがなう奇跡的な力を有する、という私の信仰……これこそ、私が自分の“最も深い”体験を彼女に話す理由なのだ。」（p. 110）

エルシーとの全人格的な関係を確立するためには、内心の淫らな思いを排斥し、心の軌跡の全てを把握して彼女に伝えねばならぬ。これは同時に自己の人格の矯正に努めることを意味する（p. 181等。下記参照）。さらに熱帯の自然美を共に堪能する（pp. 125、240等。下記参照）ためにも、また新しい社会学理論の創造にともにあずかる（pp. 116、219、284、285等）ためにも、フィールドで起こる全ての事柄を、逐一、彼女に報告しなければならない。『日記』はそのために欠かせぬ手段となる（p. 186。下記参照）。

「その間ずっと考えていたこと：必ずできるという確信を持って、彼女に対する内的純粋さを保つこと。行為の純粋さは思惟の純粋さいかんによるということがわかり、自己の最も深い本能にまで下りて、自分を見つめてみようと決心した。最も重要なことは、自慰や淫売買いなどのぬかるみへの激しい嫌悪をかきたてることであり、こうした嫌悪を形成する全てのものを探し求めることである。」（p. 181）

「散歩のあいだ知的活動は一休みにして、色や形を音楽のように味わった。無理に系統だてたり変形したりせずに、ただあるがままの姿、形を感じとればよいのだ。この間私のそばではE.R.M.が一緒にこの光景を眺めているように思われた。」（p. 125）

「日記の意味について考えた：人生における進路変更、価値観――すなわち倫理の内容――の再編成。――これらの変化は調和という価値の導入によるところが大きかった。自らの強烈な欲望を矯め、好色を排し、E.R.M.に専心することによって、幸福がもたらされ、ただ単になすがままに時を過ごす以上の、人生の充実をもたらしてくれた。」（p. 186）

だが以上のような決意にもかかわらず実際はなかなか思い通りにならない。確かに体調が良く、

仕事がはかどっている時は、淫らな思いに悩まされることもなく、E.R.M. に対する純粋な愛情に満足している。だが病気やオーストラリアから届く手紙に心をかき乱された後などは、原住民や白人女性に好色の目を向け、情緒的にも低調で、仕事もはかどらない。知と官能の調和のとれた全人格的結合をめざしながら、実際はその両端に引き裂かれるという矛盾に満ちていた。このような状態が、周期的に繰り返されながら、調査終了までずっと続く。

この点に関するストッキングの以下の指摘は、大変示唆に富む。彼は前出の論文の中で、しばしばマリノフスキーの原住民蔑視の顕れとして取り上げられる niggers という語の持つ背景を分析している。彼によれば、niggers の用語は、『日記』の第一部には登場せず、初めて使用されるのは第三回調査の開始後二ヶ月ほど経ってからである（p. 154）。その後、孤独感や文明への渇望――すなわち E.R.M. への思慕――が深まるにつれて、次第に頻繁に登場するようになる。換言すれば、niggers の用語は欲求不満――ことに性的欲求不満――のコンテキストに限定される、と言う[36]。人一倍性衝動の強いマリノフスキーが、原住民の官能的魅力を目のあたりにしながら、霊妙な魅力を有する E.R.M. との全人格的関係の確立に向けて、日夜、自己と格闘する。このような状況におかれたマリノフスキーは、下記のような正直な感想をもらしもしている。

> 「次のような不一致が存在することを残念に思った：肉体的な魅力とその人格への嫌悪という不一致が。（これは具体的には原住民を指す。）人格的に魅かれると、今度は肉体的にたいした魅力を感じない。（具体的には E.R.M.）」（p. 273）

このような性に対する対処の仕方――すなわち知と官能の矛盾とその止揚――こそ、上述の欲求不満のコンテキストと、niggers の用語法を理解する鍵となる。このことは、ストッキングの言葉を借りれば、「『闇の奥』（＝ヨーロッパ社会と隔絶した場所）で、己れの（もろもろの）本能と向い合う」[37]ことから生じざるをえない、すぐれて人類学的な欲求不満の象徴と考えることも可能であろう。

Ⅵ　結びに代えて

以上、マリノフスキーの業績、調査の態度、女性観をめぐるパラドックスの基底には、全ての基調となるある旋律が流れているように思われる。この小論で取り上げたさまざまなパラドックスの多彩な様態は、全ての基調となるある旋律の変奏曲である、と考えられなくもない。『日記』の中で、新しい社会学理論の創造に意欲を燃やし、しかも現実に理論的洞察力という資質にも恵まれていたマリノフスキーだが、実際の社会分析に際しては、どうしても個々人の隠れた動機の分析にとれわれてしまい、抽象的一般理論の定式化にまで目を向けられない。またフィールド・ワークにおいては、原住民や彼らの文化を理解し、その価値を充分に認識しながら、どうしてもそれに対する生理的嫌悪感を抑えきれなかった。さらに女性との関係においては、知と官能の調和のとれた充足をめざして、唯一の女性と全人格的関わりを希求しながら、自己の性的欲求を彼

女との関係の内に昇華しきれなかった。理論的関心においても、原住民や女性との関係においても、自己の目標とする理想の世界に到達できずに、いずれの場合も、「想像力が地を這わざるをえなかった」のである。

だがそのことを誰よりも深く認識し苦悩していたのは、他ならぬマリノフスキー自身だったのではなかろうか。自己の欠陥を認識しつつ、目標とする理想の実現に向かって、自己との闘いを続けるマリノフスキーに対して、理論的抽象化や、原住民との一体化や、女性に対する誠実さが不完全だったからと言って、いったい誰が彼を非難できようか。むしろマリノフスキーほど、自己との闘いのプロセスを徹底的に生き抜き、その生の苦悩から数々のすぐれた業績を産み出した、“偉大な”人類学者は稀であろう。

上述のプロセスから「一切の虚偽の幻想を排する」ということは、マリノフスキーにとっては、まず第一に個人の本能や心理と徹底的に向き合うことであり、その段階を経ぬまま、高度な理論的抽象化や、原住民との一体化や、唯一の女性との人格的結合の可能性を信じるわけにはいかなかったのであろう。当然、彼自身は、ニューギニア調査の間も、またそれ以後も引続き、次の段階への移行をめざしていた筈である。だが、突然の死によって、その志なかばでたおれざるをえなかった、というのが実情であろう[38]。このような観点からして、彼自身は「抽象的理論に対する偏見」を持っていたわけではなく、また被調査者や女性との関係においても、真の全人格的結合を放棄していたわけではない、というのが筆者の結論である。

注

(1) マリノフスキーの晩年には、弟子達の多くが彼の下を去り、ラドクリフ・ブラウン流の構造機能分析を支持するようになる。その中にあって、最後まで彼に師事し続けた数少い高弟の一人である。

(2) Firth. R. (1981) : 103

(3) 青木　保 (1982) ：50

(4) マリノフスキーとラドクリフ・ブラウンをめぐる評価の歴史的変遷については、青木　保 (1982) 参照。

(5) Leach, E.R. (1957) : 119

(6) ibid. : 120

(7) Kabbery, P. (1957) : 71

(8) Malinowski, B. (1922) : 25

(9) ibid. : 4 − 8

(10) ibid. : 11−24

(11) Parsons, T. (1957) : 53

(12) Leach, E.R., op. cit. : 119

(13) Richards, A.I. (1957) : 26, Kuper, A. (1973) : 30, Young, M. (1979) : 7 − 8 , Kabbery, P. op. cit. : 80−83

(14) Kuper, A. op. cit. : 31, 36, 49

(15) Leach, E.R. op. cit. : 120

(16) Firth, R. op. cit. : 104

(17) Geertz, C. (1976) : 221

(18) Hogbin, I. (1968), Geertz, C. (1967), Wax, M.L. (1972), Hsu, F.L.K. (1979)

(20) Firth, R. (1967), Mair, L. (1981)

(21) Hsu, F.L.K. op. cit. : 518

(22) Leach, E.R. (1980), Hsu, F.L.K. (1980), Mair, L. (1980)

(23) Kabbery, P. op. cit. : 77－78

(24) Stocking, G. (1968) : 190

(25) Young, M. op. cit. : 5

(26) Malinowski, B. (1967) : 9, 15, 17, 19－22, 26, 36, 43, 45, 47, 52, 58, 61, 71, 77, 82－83, 89－91, 96

(27) Malinowski, B. (1922) : 8

(28) 『くたばれ、野蛮人』の語は、コンラッドの小説『闇の奥』(Heart of Darkness) からの引用であることを、ストッキングやリーチが指摘している。両者によれば、この語は、ヨーロッパ人であるマリノフスキーが、原住民に対して抱かざるをえなかった苦渋に満ちた心理の表明であると言う。

(29) Stocking, G. op. cit. : 192

(30) Wayne, H.M. (1985) : 529。以下、Ⅳ－2およびⅣ－3、Ⅳ－4の記述は同書による。

(31) ibid. : 529

(32) Firth, R. (1981) : 107

(33) Wayne, H. op. cit. : 537－538

(34) ibid. : 532。ジョゼフ・コンラッドのいとこにあてた手紙の中で、「もしブラントン夫人に出会わなかったら、私は社会学を専攻しようとも、いくぶん英国かぶれになることもなかったであろう」と述べている。

(35) 彼が婚約を破棄しようと考えていたN.S.に対してさえも、何とかして友好な関係を維持し続けたいと、いつまでも悩んでいる。

(36) Stocking, G. op. cit. : 190。『闇の奥』はコンラッドの小説の題名を、ストッキングが援用したもの。

(37) ibid. : 192

(38) マリノフスキー自身は、数度の予備調査を経て、本格的なメキシコ市場調査を開始すべく準備している最中に、心臓麻痺のため急死した。

引用・参考文献

青木　保；「「20年代神話」の破壊」『思想』2月号、1981、pp. 46－56

Firth, Raymond ; "Introduction" in Raymond Firth ed., Man and Culture, London, Routledge & Kegan Paul, 1957, pp 1 －14

Firth, Raymond ; "Introduction" in Bronislaw Malinowski, A Diary in the strict Sence of the Term, New York, Harcourt, Brace & World, Inc., 1967, pp xi－xix

Firth, Raymond ; "Bronislaw Malinowski" in Sydel Silverman ed., Totems and Teachers, 1981, pp 101－141

Geertz, Clifford ; "Under the Mosquito Net" in New York Review of Books, vol. 9. No. 4, 1967, pp 12－14

Geertz, Clifford, ; "From the Native's Point of View" in K.H. Basso & H.A. Selby eds., Meaning in Anthropology, Albuquerque, University of New Mexico Press. 1976

Hogbin, Ian ; "A Diary in the Strict Sense of the Term" in American Anthropologist, vol. 70, 1968, p 575

Hsu, Francis L.K. ; "The Cultural Problem of the Cultural Anthropologist, American Anthropologist, vol. 81. No. 3, 1979, pp 517－532

Hsu, Francis ; "A Reply to Dr. E.R. Leach" in RAIN No. 39, 1980, pp 4 － 6

Kabbery, Phyllis ; "Malinowski's Contribution to Fieldwork Methods and the Writing of Ethnography" in R. Firth ed., Man and Culture, London, Routledge & Kegan Paul, 1957, pp 71－91

Kuper, Adam ; Anthropologists and Anthropology : The British School 1922－1972, London, Allen Lare, 1973

Kuper, Adam ; "The Man in the Study and the Man in the Field" in Archives Européenes de Sociologie, vol. 21, 1980, pp 14－31

Leach, E.R. ; "The Epistemological Background to Malinowski's Empiricism" in R. Firth ed., Man and Culture, London, Routledge & Kegan Paul, 1957, pp 119－137

Leach, E.R. ; "On Reading a Diary in the Strict Sense of the Term : Or the Self Multiplation of Professor Hsu" in RAIN, No. 36, 1980, pp 2 － 3

Leach, E.R. ; "Malinowski's Diary" in RAIN, No. 40, 1980, p 7

Mair, Lucy ; "Interpretation and Character Assassination" in Man, vol. 16, No. 2, 1981, pp 302－304

Mair, Lucy ; "Malinowski's Diary" in RAIN, No. 40, 1980, p 7

Malinowski, B. ; Argonauts of the Western Pacific, London, Routledge & Kegan Paul, 1922

Malinowski, B. ; A Diary in the Strict Sense of the Term, New York, Harcourt, Brace & World, Inc., 1967

Parsons, Talcott ; "Malinowski and the Theory of Social Systems" in R. Firth ed,. Man and Culture, London, Routledge & Kegan Paul, 1957, pp 53－70

Powdermaker, Hortense ; "An Agreeable Man" in New York Review of Books, vol. 9, No. 8, 1967, pp 36－37

Richards, Audrey I. ; "The Concept of Culture in Malinowski's Work" in R. Firth ed., Man and Culture, London, Routledge & Kegan Paul, 1957, pp 15－32

関口時正；「ブロニスラフ・マリノフスキーの日記をめぐって」『西スラブ学論集』第1号、1986（近刊）

Stocking, George W. ; "Empathy and Antipathy in the Heart of Darkness : An Essay Review of Malinowski's Field Diaries" in Journal of the History of the Behavioral Sciences, vol. 4, No. 2, pp 189－194

Strenski, Ivan ; "Malinowski : Second Romanticism" in Man, vol. 17, No. 4 , 1982, pp 766－771

Thronton, Robert J. ; "Imagine Yourself Set Down" in Anthropology Today, vol 1, No. 5, 1985, pp 7 －14

Wax, Murray L. ; "Tenting with Malinowvki" in American Sociological Review, vol. 37, No. 1, 1972, pp 1 －13

Wayne, Helena ; "Bronislaw Malinowski : the Influence of Various Women on His Life and Works" in American Ethnologist, vol. 12, No. 3, 1985, pp 529－540

Young, Michael W. ; "Introduction" in M. Young ed., The Ethnography of Malinowski, London, Routledge & Kegan Paul, 1979, pp 1 －20

Young, Michael W. ; "The Intensive Study of Restricted Area, Or, Why Did Malinowski Go to the Trobriand Islands?" in Oceania, vol. 55, No. 1, pp 1 －26